

転重軽受の思想史

——特に浄土教をめぐって——

小川 法道

〔抄 録〕

浄土教には往生浄土という当益の他に現益として、「転重軽受」や「延年転寿」の思想がある。「転重軽受」の思想は、大乘仏教における業思想の中で特色的なものとして位置づけられ、本来ならば重く受けるはずの業報を軽減するはたらきがあることをいう。この「転重軽受」については従来、その思想史的背景などについてはあまり研究がなされていない。そこで本稿では「転重軽受」

の思想史を概観し、「転重軽受」の思想がどこに淵源するのか、また浄土教において「転重軽受」がどのような役割を果たしたかについて明らかにしたい。

キーワード 転重軽受、業転、宿業、懺悔、滅罪

はじめに

大乘仏教における業思想の中で特色的なものとして、業報を軽減することができるといふ「転重軽受」の思想がある。この「転重軽受」の思想については神居文彰氏の研究がある。神居氏は「転重軽受」とは、大乘の『大般涅槃經』の「獅子吼菩薩品」を由来とする觀念であるとし、仏力や懺悔、智慧の力などで重い業の報いを転換させて軽く受けさせる作用のことであると説明して、宿業と関係があると述べて

いる。「転重軽受」の思想を概観する先行研究としては、これ以外管見においては見当たらない。しかし「転重軽受」の思想の由来を大乘の『涅槃經』のみに求めることには検討の余地がある。神居氏の論はおそらく日蓮の「転重軽受法門」によっているのであろう。^②そこで本稿では、この「転重軽受」の思想史という視点から業報を軽減するはたらきを持つ「転重軽受」の思想がどこに淵源するのか、また浄土教において「転重軽受」がどのような役割を果たしたかについて考察していくことにする。

第一章 大乘諸経論に見える転重軽受の思想史

一、般若經典類について

浄土教典籍において言及される「転重軽受」や「延年転寿」はよく現世利益の効用として挙げられ、二者とも業思想と関連のある思想である。仏教の業思想は「思」を發動因としながら「自業自得」・「善因楽果・悪因苦果」の二つの原則があるが、大乘仏教においては空思想の觀念により、その業報の原則を超克しようになる。ここではまず、空思想と関連のある般若經典を中心に取り上げてみたい。般若經典には数多くの種類があるが、その中でも『金剛般若波羅蜜經』（以下、『金剛般若經』と略す）は大乘仏教の最初期に成立しているとされる。そこで鳩摩羅什訳『金剛般若經』を見ると、「転重軽受」の觀念に相当する次のような經文がある。

復次須菩提。善男子善女人受持讀誦此經。若爲人輕賤。是人先世罪業應墮惡道。以今世人輕賤故。先世罪業則爲消滅。當得阿耨多羅三藐三菩提。^①

ここでは善男子善女人がこの『金剛般若經』を受持し、読誦して、人のために説いても辱められることがあるという。それは前世に造った罪業（宿業）のためであるが、惡道に墮ちるべきその罪が現世で辱められることで前世の罪業が消滅して、阿耨多羅三藐三菩提を得ると説くのである。ここには「転重軽受」の語は見られないが、内容的に「転重軽受」の思想と合致している。『金剛般若經』は他に、菩提流支・菩提留支・真諦・笈多・義浄・玄奘と計七訳あるが、どれもこの

『金剛般若經』を受持し、読誦して、現世で「辱められる」^①ことで、前世で造った罪業が消滅すると説いている。教法の伝持については『法華經』法師品に出る五種法師などが知られているが、『金剛般若經』においても、大乘仏説の權威性を強調するために、このことが説かれたと考えられる。

次に般若經典の中で「転重軽受」を述べているものとして、鳩摩羅什訳『摩訶般若波羅蜜經』（以下、大品『般若經』と略す）が挙げられる。その大品『般若經』巻第一「習応品」には次のように述べる。

舍利弗。菩薩摩訶薩能如是行般若波羅蜜。惡魔不能得其便。世間衆事所欲隨意。十方各如恒河沙等諸佛。皆悉擁護是菩薩。令不墮聲聞辟支佛地。四天王天乃至阿迦尼吒天。皆亦擁護是菩薩。不令有閼。是菩薩所有重罪現世輕受。何以故。是菩薩摩訶薩用普慈加衆生故。舍利弗。菩薩摩訶薩如是行。是名與般若波羅蜜相應。^②

ここでは菩薩摩訶薩が般若波羅蜜を行することで、惡魔の妨げを受けることもなく、世俗の事柄にも滞ることなく対処することができるという。十方の恒河沙等の諸仏は般若波羅蜜を行ずる菩薩を擁護し、二乗の地に墮せしむこともない。また仏法と仏法に帰依する人々を守護する四天王や色界の最高天であるアカニシユタ天もこの菩薩を擁護し仏道の障礙を排除する。この菩薩は来世に受けるべきあらゆる重罪の果報を現世に軽く受けるのである。その理由は、この菩薩が慈悲を衆生に加えるからであり、そうした行が般若波羅蜜と相応するという。つまり般若波羅蜜を行ずることによって、般若の智慧とそこから生ずる

る慈悲を自利利他にふり向けるから、来世・後世に受けるべき重罪の果報を現世に軽く受けるというのである。ここに六波羅蜜行の功德としての「転重軽受」の思想を見ることが出来る。またこの大品『般若経』の註釈書である龍樹の『大智度論』巻第三七では、次のように述べている。

釋曰。今讚_二是菩薩_一。如_レ上行_二般若波羅蜜_一得_二大功德_一。是名_二菩薩_一。智慧功力果報得_二此五利_一。……中略……所有重罪者。先世重罪應_レ入_二地獄_一。以_レ行_二般若波羅蜜_一故現世輕受。譬如_二重囚應_レ死有_二勢力者_一護_二則受_二鞭杖_一而已。又如_二王子雖_レ作_二重罪_一以_二輕罰_一除_レ之。以_二是王種中生_一故。菩薩亦如_レ是。能行_二是般若波羅蜜_一得_二實智慧_一故。即入_二佛種中_一生。佛種中生故雖_レ有_二重罪_一云何重受。復次譬如_二鐵器中空故在_レ水能浮中實則沒_一。菩薩亦如_レ是。行_二般若波羅蜜_一智慧心虚故不_レ沒_二重罪_一。凡人無_二智慧_一故沈_二沒重罪_一。復次佛此中自說_二因緣_一所_二以得_二五功德_一者。用_二菩薩加_二衆生_一故。問曰。先言_二行_二般若波羅蜜_一故具_二五功德_一。今何以言_二用_二菩薩_一加_二衆生_一故。答曰。能生_二無量福_一無_レ過_二於_レ慈_一。是慈因_二般若波羅蜜_一生。得_二無量利益_一。復次惡魔不_レ得_レ便。諸佛所_二念重罪_一今世輕受。是般若波羅蜜力。世間衆事所_レ欲隨_レ意諸天擁護是大慈力。復次有_二二種緣_一。一者衆生。二者法。是菩薩若縁_二衆生_一則是慈心。若縁_二法則是行_二般若波羅蜜_一。是慈從_二般若波羅蜜_一生。隨_二順般若波羅蜜教_一。是故説_二慈無_レ咎_一。

『大智度論』は「所有重罪者」についての註釈で、前世に重罪を犯した者は必ず地獄に堕ちる者と規定した上で、般若波羅蜜を行ずるこ

とによってその重罪を現世に軽く受けると説いている。そして譬えを挙げて、重罪を犯し死刑となるべき囚人でも勢力者に護られれば鞭打ちだけで済むことや、王子が重罪を犯したけれども軽罰で済むことを挙げ、般若波羅蜜を行じると真実の智慧を得て、仏種の中に生じるから重罪を犯しても重く受けることはないという。重罪を犯しても軽く受けることができるのは般若波羅蜜行の功德であり、般若の智慧と慈悲が「転重軽受」の「転」ずる力となっているのである。

この他、般若經典の中で「転重軽受」について述べるものに玄奘訳の『大般若波羅蜜多經』（以下、『大般若經』と略す）がある。『大般若經』は全六百卷から成り、約一六種の般若經典から構成されている。その巻第七では次のように述べている。

復次舍利子。諸菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時。與如是般若波羅蜜多相應故。善能安立無量無數無邊有情於無餘依般涅槃界。一切惡魔不得其便。所有煩惱皆能伏滅。世間衆事所欲隨意。十方各如殑伽沙界一切如來應正等覺。及諸菩薩摩訶薩衆。皆共護念如是菩薩。不令退墮一切聲聞獨覺等地。十方各如殑伽沙界四大王衆天。三十三天。夜摩天。覩史多天。樂變化天。他化自在天。梵衆天。梵輔天。梵會天。大梵天。光天。少光天。無量光天。極光淨天。淨天。少淨天。無量淨天。遍淨天。廣天。少廣天。無量廣天。廣果天。無量天。無熱天。善現天。善見天。色究竟天。及餘一切聲聞獨覺。皆共擁衛如是菩薩。諸有所爲令無障礙。身心疾惱咸得痊除。設有罪業。於當來世應招苦報轉現輕受。何以故。舍利子。是菩薩摩訶薩。於諸有情慈悲遍故。舍利子。是菩薩摩訶薩修行般若

波羅蜜多。威神力故。少用加行便能引發最勝自在。陀羅尼門三摩地門令速現起。隨所生處常得奉事一切如來應正等覺。乃至證得所求無上正等菩提。於其中間。常不離佛。舍利子。是菩薩摩訶薩修行般若波羅蜜多時。與如是般若波羅蜜多相應故。得如是等無量無數不可思議微妙功德。¹⁴

ここでは菩薩摩訶薩が般若波羅蜜を行ずる時には、般若波羅蜜と相應するから、一切の惡魔の妨げを受けず、十方の諸菩薩に擁護されるために為す所に障礙がなくなり、身心の疾悩が尽く痊愈されるという。そしてたとえ未來世に苦報を招く罪業があつても転じて輕受するという。それは菩薩摩訶薩が有情に対して慈悲を以て接するからであり、また般若波羅蜜を修行する威神力の故に、このような無量無數の不可思議微妙の功德が得られるのである。この『大般若經』卷第七は玄奘訳が初出とされているが、この部分に関しては先の大品『般若經』の内容を詳しくしたものであり、内容的に変わらないと言つてよい。¹⁵

しかし般若波羅蜜を行ずることによって得られるこのような功德に関して、例外も見られるのである。例えば、『大般若經』卷第二二六では、善男子善女人が書写したところの般若波羅蜜多を觀察し礼拝し誦誦して、供養し恭敬し尊重し讚嘆することによって、あらゆる天人衆が来て随逐擁護するから、一切の人・非人等に悩害されないことを説いた後に、次のように述べている。

唯除宿世定惡業因現在應熟。或轉重業現世輕受。¹⁷

つまり宿業で受けるべき果報が現在において熟したものの、あるいは転重業したものに關しては般若波羅蜜の果を受けることができないと

する。ここに業思想の一つの因に対して、一つの果を受けるという原則が見られる。¹⁸しかしこれによつて般若波羅蜜多を行じた者には、重く受けるべき果報を転重輕受することが可能なことが明白となった。このように一連の般若經典群とその註釈にも、転重輕受という思想が説かれていたことは明らかである。

二、『涅槃經』について

次に「転重輕受」の思想を説いているものとして、大乘の『涅槃經』がある。代表的な漢訳として曇無讖訳『大般涅槃經』（以下、北本『涅槃經』と略す）がある。北本『涅槃經』卷第一九「梵行品」には、阿闍世が殺父の罪を犯したことを後悔して苦しみから逃れられないことを嘆いたことに対して、耆婆が次のように答えている。

耆婆答言。善哉善哉。王雖作罪心生重悔而懷慚愧。大王。諸佛世尊常說是言。有二白法能救衆生。一慚二愧。慚者自不作罪。愧者不教他作。慚者内自羞恥。愧者發露向人。慚者羞人愧者羞天。是名慚愧。無慚愧者不名爲人。名爲畜生。有慚愧故則能恭敬父母師長。有慚愧故說有父母兄弟姊妹。善哉大王。具有慚愧。大王且聽。臣聞佛說。智者有二。一者不造諸惡。二者作已懺悔。愚者亦二。一者作罪。二者覆藏。雖先作惡後能發露。悔已慚愧更不敢作。猶如濁水置之明珠。以珠威力水即爲清。如烟雲除月則清明。作惡能悔亦復如是。王若懺悔懷懺愧者。罪即除滅清淨如本。¹⁹

耆婆は阿闍世が罪を造つたことを心から重く悔いて慚愧の心を懷いていると知り、諸仏世尊が説かれた救いの教説を阿闍世に説明する。

それは二種の清浄な善法で救済のはたらきをもった「慚」と「愧」とである。「慚」とは自ら罪を造らないこと・内に羞恥心を懷くこと・人に恥じることであり、「愧」とは他人に罪を造らないように教えること・他人に対して罪を発露すること・天に恥じることであり、これらが「慚愧」の意味である。「慚愧」の心がない者は人ではなく、人の形をした畜生であり、「慚愧」の心があるから父母・師長に恭敬することが出来るという。耆婆は阿闍世が「慚愧」の心を持つていることから、智者には諸惡を造らない智者と、造つてもすぐに懺悔する智者の二通りがあることを説く。そして濁つた水の中にマニ宝珠を入れると、その珠の威力で水はすぐに清浄になるように、雲や煙が除かれると月は明瞭になるように、惡行を造つても後悔すれば、身心が清浄になると説いて、阿闍世が懺悔して慚愧の心を懷くのであるならば、罪はすぐに滅して元のように清浄になると説き、懺悔による滅罪を説いているのである。ここでは人間の中にあつても慚愧の心がなければ畜生と同じであるとして、「慚愧」の心を懷くことを強調している。⁽²⁰⁾このように仏教の中で阿闍世は惡を犯した者の代表者として表されることが多く、阿闍世以外には、央掘摩羅や提婆達多等がその代表として挙げられるのである。また北本『涅槃經』卷第二〇「梵行品」では、阿闍世が父の頻婆娑羅王を殺したことの後悔に関して、次のように述べている。

大王。一切衆生所作罪業凡有二種。一者輕二者重。若心口作則名為輕。身口心作則名為重。大王。心念口説身不作者所得報輕。大王。昔日口不勅殺但言削足。大王。若勅侍臣立斬王首坐時乃斬猶

不得罪。況王不勅云何得罪。王若得罪。諸佛世尊亦應得罪。何以故。汝父先王頻婆娑羅。常於諸佛種諸善根。是故今日得居王位。諸佛若不受其供養則不爲王。若不爲王汝則不得爲國生害。若汝殺父當有罪者。我等諸佛亦應有罪。若諸佛世尊無有罪者。汝獨云何而得罪耶。大王。頻婆娑羅往有惡心。於毘富羅山遊行獵鹿。周遍墮野悉無所得。唯見一仙五通具足。見已即生瞋恚惡心。我今遊獵所以不得。正坐此人驅逐令去。即勅左右而令殺之。其人臨終生瞋惡心退失神通。而作誓言。我實無辜汝以心口橫加戮害。我於來世亦當如是還以心口而害於汝。時王聞已即生悔心供養死屍是王如是尚得輕受不墮地獄。況王不爾。而當地獄受果報耶。先王自作還自受之。云何令王而得罪。如王所言父王無辜者。大王。云何言無夫有罪者則有罪報。無惡業者則無罪報。汝父先王若無辜罪云何有報。頻婆娑羅於現世中亦得善果及以惡果。是故先王亦復不定。以不定故殺亦不定。殺不定故云何而言定入地獄。⁽²¹⁾

ここでは衆生が罪を造るのに、輕重の二種あることを説く。心口二業による罪は輕いといい、身口意の三業による罪は重いという。つまり心に念じ口で言つても身で行わなければ罪は輕いのである。諸仏世尊は阿闍世が昔、口で殺せとは言わずに足を削れと言つた故に罪は輕く、もし家臣に立ち上がった王の首を切れと命じているのに、坐つている時に首を切つたら罪にはならないと言つて、阿闍世王が罪になるなら、諸仏世尊も罪になるという因縁を説く。それは頻婆娑羅王が常に諸仏に供養し種々の善根を積んでいたために王位に就くことができたとし、供養していなかったら王位に就くこともなかったから、頻

婆娑羅王が王に就かなかつたら阿闍世は父を殺害する罪を造ることがなかったとして、諸仏世尊にも罪があるという。それから頻婆娑羅王が過去に悪心を抱いていたことを説く。すなわち父王が毘富羅山に鹿を狩猟に行った時、周辺の野原に獲物を得ることがなく、一人の五神通を具えた仙人だけが現えて、父王に瞋恚の悪心が生じた。父王は狩猟しているのに獲物が得られなかったのは、この坐っている仙人が追い払ったからであると考え、側近に仙人を殺させた。その仙人は臨終の時に、罪がない私（仙人）を王は口と心で危害を加えた故に、私も来世において心と口で王に危害を加えることを誓った。父王はそれを聞いて、すぐに懺悔心が生じ、仙人の遺体を供養したために、このような罪を軽く受け、地獄に堕ちることはなかったという。阿闍世は父王に咎はなかったと言うが、罪有る人は罪の報いを受けるから、頻婆娑羅王は現世で善果として王と成り得たし、惡果として殺されたのである。父王の報いは不定業であり、殺害も不定業であるとして、不定業を強調するのである。ここで注目したいのは罪の軽重について意思を伴う口業による罪は軽く、意思を伴った身口意の三業の罪は重いとする説である。これは仏教が意業を重視する教説であるからこそ、懺悔することによって「業転」する可能性が生じ、頻婆娑羅王の罪も懺悔し供養したことで地獄に堕ちる罪から免れたのである。地獄に堕ちる罪が現世での殺害で停まったことに「転重軽受」の思想が見出せるのであり、「転重軽受」は不定業の故に可能となるのである。この不定業に注目したい。北本『涅槃經』卷第三一「獅子生まれ薩品」²²では、次のように述べる。

一切作業有輕有重。輕重二業復各有二。一者決定。二者不決定。善男子。或有人言惡業無果。若言惡業定有果者。云何氣噓旃陀羅而得生天。鳶掘摩羅得解脫果。以是義故。當知作業有定得果不定得果。我爲除斷如是邪見。故於經中說如是語。一切作業無不得果。善男子。或有重業可得作輕。或有輕業可得作重。非一切人唯有愚智。是故當知非一切業悉定得果。雖不定得。亦非不得。善男子。一切衆生凡有二種。一者智人。二者愚癡。有智之人以智慧力。能令地獄極重之業現世輕受。愚癡之人現世輕業地獄重受。²³

ここでは業に輕業と重業の二つがあり、またその輕重業にそれぞれ決定業と不決定業があるという。惡業には果なしという者もいれば、惡業に果ありという者もいると業の果報に関する見解を持ち出した上で、不可觸民の氣噓が天界に生まれた例や、央掘摩羅が解脫した例を挙げて、惡業を犯しても果報がない場合もあることを説く。これは釈尊が業を作れば必ず果報を受ける（定業）、あるいは受けない（不定業）という邪見を除くためであつて、それ故「一切の作業、果を得ざること無し」と説いたというのである。また智慧のある人は智慧力によって、地獄で受ける重業の果報を現世で軽く受け、愚痴の人は現世で受ける輕業を地獄で重く受けるという。ここに見る「転重軽受」は先に見た『般若經』のように「智慧力」によって「転」ずることができるとするものである。また「獅子吼菩薩品」は定業と不定業に関して次のように述べる。

若言諸業有定不定。定者現報生報後報。不定者緣合則受不合不受。以是義故。應有梵行解脫涅槃。當知是人眞我弟子非魔眷屬。善男

子。一切衆生不定業多決定業少。以是義故有修習道。修習道故決定重業可使輕受。不定之業非生報受。善男子。有二種人。一者。不定作定報。現報作生報。輕報作重報。應人中受在地獄受。二者。定作不定。應生受者迴爲現受。重報作輕。應地獄受人中輕受。如是二人一愚二智。智者爲輕愚者令重。⁽²⁴⁾

もし諸々の業に定業・不定業があるのであれば、定業には現報・生報・後報のいずれかがあつて必ず報いを受けなければならない。不定業は縁が和合すれば果報を受け、縁が和合しなければ果報を受けない。特に一切の衆生には不定業の方が多く、定業は少ないのである。それ故、決定の重業を軽く受けさせるために仏道を修習する必要があるというのである。また不定業は生報ではないとして二つの例を説く。一つは不定業を定業とし、現報を生報とし、輕報を重報として、人である内に受けるべき果報を地獄で受けるようにしてしまう愚痴の人であり、いま一つは定業を不定業とし、生報を現報とし、重報を輕報として、地獄で受けるべき重報を現世で軽く受けるようにする智慧ある人である。このように『涅槃經』では、智慧ある人が「智慧力」・「善業多」・「発露懺悔」等の「身戒心慧を修習する」ことによつて、「転重輕受」することが見出だせ、その業転の思想は不定業をめぐつて展開しているのである。⁽²⁵⁾

三、『十住毘婆沙論』について

先の『涅槃經』の中でも、阿闍世や央掘摩羅は悪人の代表者であると述べたが、そこに阿育王を加えて言及するものに『十住毗婆沙論』

(以下、『十住論』と略す)がある。この『十住論』の「懺悔」の説示が業思想との重要な関連性を帯びているため、ひとまず『十住論』における「懺悔」の説示について見ていくことにする。『十住論』巻第五「除業品」では懺悔について次のように述べている。

十方無量佛 所知無不盡 我今悉於前 發露諸黑惡
三三合九種 從三煩惱起 今身若先身 是罪盡懺悔

於三惡道中 若應受業報 願於今身償 不入惡道受⁽²⁶⁾
十方に在る諸仏は我々が犯した業を知り尽くしている。そこで諸仏の前で罪惡を發露する。その罪は身口意の三業とそれぞれに現報・生報・後報があるので合わせて九種である。それらは貪瞋癡より起つたものである。それを今身あるいは前身の罪すべてを懺悔すべきである。三惡道中において業報を受けるのであれば、願うところは今身において罪を償い、惡道に入つて業報を受けないように、ということである。この願文は、懺悔によつて今身で罪を償うこと、それによつて本来は後世において重く受ける業報を今生において軽く受ける、所謂「転重輕受」の思想がみられる。そして懺悔・勸請・隨喜・廻向の所謂、四悔の功德が説かれる巻第六「分別功德品」では、このような「懺悔」の福德が最大であるとして次のように述べている。

於諸福德中。懺悔福德最大。除業障罪故。得善行菩薩道行。
勸請隨喜迴向。與空無相無願。和合無異。復次懺悔。如如意珠。
隨願皆得。…中略…是故當知懺悔有大果報。⁽²⁷⁾

諸々の福德の中で「懺悔」の福德が最大である理由が業障の罪を除くからであるとする。そして、懺悔によつて菩薩道を善行し、勸請・

随喜・廻向を行じ、空・無相・無願と和合して異なることなき境位を得るという。こうした懺悔に始まり廻向に終わる菩薩道は如意珠のように「願い」に応じて除罪滅罪という大果報を得ることができると説くのである。このような「懺悔」と「転重軽受」の脈絡を述べる例として、『十住論』巻第六「分別功德品」の次のような一節を挙げることができる。

有_レ大福德者_一 雖_レ有_レ罪惡事_一 不_レ令_レ墮_二地獄_一 現身而輕受
譬如_二鴛鴦魔_一 多殺_二於人衆_一 又欲_レ害_二母佛_一 得_二阿羅漢道_一
今世輕受又如_二阿闍世害_一得道父王。以_二佛及文殊師利因縁_一故重罪
輕受。…中略…又如_二阿輸伽王_一。以_レ兵伏_二閻浮提_一。殺_二萬八千宮人_一。
先世施_二佛土_一故。起_二八萬塔_一。常於_二大阿羅漢所_一聽_二受經法_一。後得_二
須陀洹道_一。即人身輕償。如_レ是等罪多行_二福德_一志意曠大。集_二諸功
德_一故不_レ墮_二惡道_一。是故汝先難_下若懺悔罪業_一。則滅盡無_レ有_二果報_一
者是語不_レ然。復次若言_二罪不_レ可_レ滅者_一。毘尼中佛說_二懺悔除罪則
不_レ可_レ信。是事不_レ然。是故業障罪應_二懺悔_一。³¹

ここでは先に余経等の中に「業を作さば必ず当に報を受くべし」や、「懺悔は業罪を除くと言ふべからず」と言われていることに対し、「我は懺悔すれば則ち罪業滅盡して報果有ること無しとは言わず。我は懺悔すれば罪則ち輕薄にして少時に於いて受くと言へり」と説くことについて論証している箇所である。この懺悔によつて業の報いを軽く受けるという説示は、「転重軽受」を想起させる。特に「転重軽受」の思想はこの現世において受ける業の果報を論じているのであり、先に論じた懺悔によつて三惡道に墮ちる苦しみを今身において受けておく

こととも脈絡する。そして本来ならば来世で重業のために地獄に墮ちる苦しみを、現世において軽く受けた例として央掘摩羅・阿闍世・阿育王の三人を挙げる。

まず央掘摩羅³²については多数の人を殺したが、釈尊に出会い、懺悔して母と釈尊を害しないようにして、阿羅漢道を得たのである。次に阿闍世は「今世に軽く受く」例として挙げられ、得道の父王を殺害したが、釈尊と文殊菩薩の因縁によつて重罪を軽く受けたのである。最後に阿輸伽王（阿育王）は、兵力で閻浮提を征服し、一万八千の宮人を殺したが、前世で仏に土地を施し、八万の塔を建てて常に大阿羅漢の所で経法を聴受していたので、後には須陀洹道を得る。これは人身を受けているうちの輕償であるとしている。改悔を経たこのような罪は多く福德を行じ、志意広大にして諸々の功德を集めたから惡道に墮ちることはないという。よつて『十住論』は、罪業を懺悔すれば滅罪して果報を受けるといふことではないという名目のもと、実際には懺悔すれば罪が軽くなつてしばらく果報を受けるが、その果報も輕いために滅罪するのであり、業障の罪を懺悔すべきであると強調するのである。

以上、大乘仏教の諸経論に見られる「転重軽受」の思想史を追つてみた。このような「転重軽受」の思想は、従来「懺悔と滅罪」という心行の因果の対によつて研究されてきたが、その滅罪の機能の一つに「転重軽受」というはたらきを挙げるができる。故に「転重軽受」は「滅罪」を考へる上の一つの重要な思想であると考えられる。

第二章 浄土教に見える転重軽受の思想

一、源信における転重軽受の思想

前章では大乘の諸経論による「転重軽受」の思想を概観したが、いずれも「転重軽受」という語を直接使用していたのではない。では「転重軽受」の語を最初に使ったのは誰かについて考えてみたい。

「転重軽受」の語が見られるのは、中国唐代に活躍した華嚴宗の第三祖賢首大師法蔵（六四三—七一二）の『華嚴経探玄記』（以下、『探玄記』と略す）である。この『探玄記』は東晋の仏駄跋陀羅訳『大方廣佛華嚴經』六十卷本の註釈書である。その巻第七、十廻向品に説かれる十種廻向、つまり救護一切衆生離衆生相廻向、不壞廻向、等一切佛廻向、至一切処廻向、無尽功德蔵廻向、隨順平等善根廻向、隨順等觀一切衆生廻向、如相廻向、無縛著解脱廻向、法界無量廻向のうち、第五無尽功德蔵廻向の註解中、次のように述べている。

二懺悔者罪有二種。一違教遮罪還依_レ教作法悔以除滅。二違理性罪起_レ行悔滅。此有二種。一隨_レ事行懺。或方等誦_レ呪等與_レ教相應。或苦極禮_レ萬五千佛名等_レ應_レ彼聖教。或晝夜六時慇懃禮懺。以下經多載或讀_レ誦大乘_レ轉_レ重輕受等_上。如是是非_レ讚_レ嘆如來功德亦大滅_レ罪生_レ福。二依_レ理觀滅。謂觀_レ諸法空_レ罪相不可得無_レ不_レ消滅。如_レ經云。若欲_レ求_レ除滅_レ端坐觀_レ實相等。又如_レ下小相品說_レ者亦是其事。此門以_レ義亦通_レ滅_レ遮性兩罪。問如_レ受_レ持正法_レ及悔_レ先罪_上。此罪爲_レ滅爲_レ不滅_レ耶。答得_レ說_レ亦滅亦不滅。由_レ持_レ法及悔_レ令_レ重輕受_レ以_レ不_レ受_レ重是故名_レ滅。然受_レ輕故亦是不滅故。

新翻金剛般若經論說云。如_レ十惡業_レ由_レ持_レ法及悔_レ不_レ生_レ惡趣_レ名_レ拔根滅_レ。然於_レ現身_レ輕受_レ苦報_レ亦言_レ不失_レ。故彼引_レ說如來品_上云。若復有_レ人受_レ持此經_レ乃至演說。是人現世或作_レ惡夢_レ或遭_レ重疾_レ或被_レ驅逼_レ強使_レ遠行_レ罵辱鞭打乃至損_レ命。所有惡業咸得_レ消除_レ。大集經亦同_レ此說_上。³⁴

ここは、経が第五の無尽功德蔵廻向について説き明かすに当って、冒頭に「悔過し善根を修し、一切の業障を離る_上」と述べる一文に対する法蔵の解説の部分である。ここではまず懺悔を説明する中で、罪には二つがあるという。一つは違教の遮罪で、懺悔の作法によって改悔するならばその罪が滅する。もう一つは違理の性罪で、行を起して改悔するならばその罪が滅する。この改悔には二つがあつて、一つは事に随つて懺悔すること、あるいは方等經典に説かれる呪を誦すること等で、これらは教えと相應するからである。あるいは苦の極地の滅については一万五千仏の仏名を礼することである。これも聖教に順ずるからである。あるいは昼夜六時、慇懃に礼拝懺悔することを積み重ねるようにする。あるいは大乘經典を誦誦すれば、重きを転じて軽く受ける（転重軽受）などである。これらは如來の功德を讃嘆することではないけれども、大いに罪を滅して福を生ずるのであるという。また二つ目は理觀によつて滅罪することである。その内容は諸法の空を觀ずることができれば、罪相は不可得であると見られて滅罪しないことではないとして、次に経に説かれる滅罪には実相を觀すべき文を引用する。さらに『華嚴經』の佛小相光明功德品に説かれる業障・煩惱障・報障・邪見障の悔過も、共に滅罪をもたらすものであり、遮罪と性罪

の両罪を滅するのである。そして続けて正法を受持し、先罪を悔いることで罪は滅するの、という問答を設ける。その答えとして、滅でもあり不滅でもあるとし、法を持ち、罪を悔いることで、重罪の果報を軽受させると説く。この重罪の果報を受けないことを滅というとする。しかし軽受しているから不滅でもあると説き、『金剛般若波羅蜜經破取著不壞仮名論』を引用して「十悪業は正法を持ち、先罪を悔ゆることによつて悪趣に生じないのを拔根滅といい、現身において軽く苦報を受けるのを不失という。だからこの『金剛般若經』如来品には「この経を受持し、演説するならば、この人は現在に悪夢を見たり、重病にあつたり、排斥されて遠くにやられたり、罵られ鞭打ちされて命を落とすこともあるが、それによつて悪業はすべて消滅することが出来る」と説く。このように法蔵は悪趣に墮ちる果報を現世に受ける「転重軽受」する例を挙げて、その根拠として『金剛般若經』に説かれる説誦大乘による滅罪や懺悔を挙げるのである。

では浄土教においてはどうか。この「転重軽受」の内容について詳しく述べるのが恵心僧都源信（九四二—一〇一七 以下、源信と略す）である。源信は『往生要集』大文第五「助念方法」、すなわち正修念仏を助ける七事（方処供具・修行相貌・対治懈怠・止悪修善・懺悔衆罪・対治魔事・惣結要行）の中の第五に「懺悔衆罪」を挙げる。つまり源信にとつて「懺悔」は念仏の助けとなる機能を果すものと位置づけながら、「懺悔」を修して「滅罪」することについて次のような問答を設けている。

問若修懺悔能滅衆罪云何大論四十六云下戒律中戒雖復細微懺

悔即清淨犯十善戒雖復懺悔三惡道罪不除又十輪經說下造十惡輪罪一切諸佛之所不救答觀經十念能滅五逆觀佛經念佛一相能滅十惡五逆大經闍王懺除殺父之罪般若經讀誦解說能滅下殺害三界衆生之罪不墮惡趣華嚴經誦普賢願一念能滅十惡五逆明知大乘實說無不滅罪然此論文或是轉重輕受非全不受名之不論或是隨轉理門之說又感禪師會十輪經云如來密意欲令畏罪等云云餘如三下料簡念佛相門

ここではもし懺悔を修して諸罪を滅することができるといふのなら、『大智度論』巻第四六に、「戒律の中の戒は細微にわたっているけれども懺悔すれば清浄となる。しかし十善戒を犯せば懺悔しても三惡道の罪は除けない」ことや、『大乘大集地藏十輪經』（以下、『十輪經』と略す）巻四に「十惡の輪罪を造れば一切の諸仏の救済対象とはならない」と説くのか、という疑難を出している。これについて源信は、『觀經』に十念して五逆罪を滅すること、『觀仏三昧海經』に仏の相を念ずれば十惡・五逆の罪を滅すること、大乘『涅槃經』に阿闍世が殺父の罪を懺悔して罪を除いたこと、『般若經』の説誦・解説によつて三界の衆生を殺害した罪を滅し惡趣に墮ちなかつたこと、『華嚴經』の普賢菩薩の誓願を誦して一念に十惡・五逆の罪を滅することなどの経証を挙げ、大乘經典の実説によれば滅罪できないことはないと言っている。さらにそこを踏まえてこの大乘の経論は「転重軽受」を説いているとし、罪業を犯したその果報を全く受けないわけではなく、これを「除かず」といったにすぎないとしている。源信はこのような説き方を「隨轉理門」、つまり仏・菩薩の本意をそのまま説くのではな

く、聴聞者の機根に応じて説く方便であると説明している。また源信は懷感の『釈浄土群疑論』（以下、「群疑論」と略す）巻第三で『十輪經』を会通している所を用いて、「如来の密意は罪を犯すことを畏れてこのことを説いたのである」として、他のことは「問答料簡」の「念仏相門」に説いたと述べている。そこで『往生要集』大文第十「問答料簡」中の第五「臨終念相」を見てみると、同様に「転重軽受」のことについて、次のように述べている。

問五逆は順生業報時俱定云何得滅答感師釋之云九部不了教中爲下諸不信業果凡夫上密意說言有定報業於諸大乘了義教中說一切業悉皆不定如涅槃經第十八卷云耆婆爲阿闍世王說懺悔法罪得滅又云臣聞佛說修一善心破百種惡如三少毒藥能害衆生小善亦爾能破大惡又三十一云善男子有諸衆生於業緣中心輕不信爲度彼故作如是說善男子一切作業有輕有重輕重二業復各有二決定二不定又言或有重業可得作輕或有輕業可得作作重有智之人以智慧力能令地獄極重之業現世輕受愚癡之人現世輕業地獄重受阿闍世王懺悔罪已不入地獄爲掘摩羅得阿羅漢如瑜伽論說未得解脱說名決定業已得解脱名不定業如是等諸大乘經論說五逆罪等皆名不定悉得消滅轉重輕受相具出放鉢經³⁹⁾

ここでは五逆罪は来世に地獄に墮ちる順生業であるから、その果報と時期が定まっているのに、どうして滅することができるのか、との問いを出している。源信は懷感の『群疑論』巻第五を用いて、九部の不了義經の中で業果を信じない凡夫のために、密意によつて「定報の

業がある」と説いたとし、諸大乘了義經の中においては「一切の業はすべて不定業である」と『涅槃經』の文を引用して、阿闍世は罪を懺悔することによつて不定業を転じて地獄に墮ちる果報を免れ、央掘摩羅も地獄に墮ちるべき果報を転じて阿羅漢を得たという。また『瑜伽論』にはまだ解脱を得ていないのを決定業であると説き、すでに解脱を得たのを不定業であるとしている。このように諸大乘經論では五逆罪等をすべて不定業として、罪を消滅することができるとしていることを明らかにしている。ここで注目すべきは、源信が「転重軽受」の思想を大乘經典に求めているところである。大乘經典の特徴は、初期經典とは違つて、仏の慈悲加護を以て救済の道を示すところにある。源信はここで大乘經典に説かれる救済の道を広く示しながら、浄土教信仰を宣揚しているのである。また源信は「転重軽受」の相については『放鉢經』に出ると言っている。その『放鉢經』では次のように述べる。

若有菩薩道家善男子善女人宿命殃惡未盡。死當入泥犁中勤苦一劫。得善師教悔過一日一夜者。頭痛身熱諸病悉除盡。不復入泥犁中。⁴⁰⁾
ここでは菩薩道家の善男子・善女人で宿命（宿業）の罪がまだ尽きていない者は寿命が尽きた後に地獄の中に入つて、一劫の間勤苦することになるのだが、現世で善師の教えを得て悔過して一日一夜を過す者は、頭痛や熱などの病氣が悉く尽きて地獄に入ることはないという。これは宿業の罪が未だ尽きていないため地獄に入つて受けるべき果報が、悔過することによって一日一夜の病氣を受ける果報で済むことを明らかにしている。

しかし、このような滅罪の教説に関して一つの疑問が浮かぶ。それはこのように不定業を転じることによって滅罪しようとするならば、業報輪廻思想も、業思想のもつ倫理的意義も重みをもたなくなるのではないかということである。源信はこのようなことを恐れて次のような問答を展開するのである。

問所引文云智者轉重輕受下品生人但十念已即生淨土何處輕受スルヤ 答雙觀經說彼土胎生者云五百歲中不見三寶不得供養修諸善本而以レ此爲レ苦雖有餘樂猶不レ樂彼處已准レ之應知以レ七七六劫十二劫不見佛不聞法等爲レ輕受苦耳④

すなわち智者は「重きを転じて軽く受く」といわれるが、下品下生の人は十念して浄土に往生したなら、どこで軽く報いを受けるのか。つまり極楽浄土に往生したならば但受諸楽なので、軽い報いを受けることもないのではないかという問いである。源信は『無量寿経』卷下の「胎生往生」の所説を使って、その「胎生の者」は五百歳の間、三宝を見ることができず、諸仏を供養して善本を修すこともできないという。これを苦しみであるとして、その他の楽はあるのに、胎生の宮殿に住することを楽わないとしている。ここから考えると、『観経』が九品の差別を明かす所で、七七日・六劫・十二劫にわたって仏をみることができず、法を聞けない等と説いているのは、この果報を軽く苦を受けることを指している、と源信は理解している。

このように源信の『往生要集』には不定業を転ずることによって、五逆罪等の罪から免れる「転重軽受」の思想が見られる。それは源信が「業は願に由りて転ず」と説くことより、業思想の原則を仏の誓願

力によって転じて、業の超克を果たして随願往生するのである。源信は「転重軽受」や「業由願転」という仏教に伝統的な「転換」の立場から浄土教を開示している。その転換の力は源信にとって大乘仏教の浄土教、その中でも「往生の業には念仏を本とす」という念仏論に基づくものであったのである。^⑤

二、法然における転重軽受の思想

最後に、法然上人（一一三三—一二二二 以下、法然と略す）を取り上げて結びとしたい。先に大乘仏教や源信において「転重軽受」の思想について概観してきた。法然も「転重軽受」について、「かまくら」の二位の禅尼の請によって、しるし進ぜらるゝ書」として伝わる「浄土宗略鈔」において次のように述べている。

又宿業かきりありて、うくへからんやまひは、いかなるもろくのほとけかみにいのるとも、それによるましき事也。いのるによりてやまひもやみ、いのちものふる事あらは、たれかは一人としてやみしぬる人あらん。いはんや又佛の御ちからは、念佛を信するものを、轉重軽受といひて、宿業かきりありて、をもくうくへきやまひを、かろくうけさせ給ふ。いはんや非業をはらひ給はん事ましまさらんや。されは念佛を信する人は、たとひいかなるやまひをうくれとも、みなこれ宿業也。これよりもをもくこそうくへきに、ほとけの御ちからにて、これほともうくるなりこそは申す事なれ。われらが惡業深重なるを滅して極樂に往生する程の大事をすらとけさせ給ふ。ましてこのよにいか程ならぬいの

ちをのへ、やまひをたすくるちからましまさゝらんやと申事也。

されは後生をいのり、本願をたのむ心もうすき人は、かくのこゝく圍繞にも護念にもあつかふ事なしこそ善導はの給ひたれ。おなしく念佛すとも、ふかく信をおこして、穢土をいとひ極樂をねかふべき事也。かまへて心をとゝめて、このことはりをおもひほときて、一向に信心をいたして、つとめさせ給ふべき也。⁴⁶

つまり宿業の報いは、宿業によつて受けるべき病氣はいかなる仏や神に祈つても治ることはない。もし祈ることによつて病氣が治り、命が延びることがあるならば誰一人として病氣になつたり死んだりする人はいない。しかし法然は、阿弥陀仏には念仏を信じる人に対してこの宿業によつて当然のこととして決まっている重く受けるべき病氣を転じて軽く受けさせる「転重軽受」や非業を払う力があると説くのである。仏教の業思想の基本的な考えとして、仏教は宿命論ではなく、精進論であると説き、また業の発起因としての「思」、つまり意志を重視する。ここで法然は「念仏を信じる人は」と限定して、たとえいかなる病氣を受けてもこれは「宿業」による当然の事である、と説く。すなわち、法然がこの「宿業」の致すところと説く理由は、まずは業の道理を踏まえた上で、なおそこを超越して行く道筋として念仏を信仰することにあると考えられる。それ故、重く受けるべき病氣を仏の力でこれ程までに軽受しうることや悪業深重である罪を滅して極樂に往生しうると説くのである。そして善導が「後生を祈る心や本願を頼む心が薄い人は仏の圍繞や護念に預かることができない⁴⁶」ということを使って、阿弥陀仏の本願や加念をたのむ厭離穢土・欣求淨土を勧め

るのである。このように法然は阿弥陀仏を信じる人に対して、病氣を受けるのは「宿業」であるが、阿弥陀仏の力でそれを軽受させる「転重軽受」の道理を、念仏を通して開示し、業の超越を説くのである。法然はこの宿業という業の道理を踏まえながら阿弥陀仏への「信」の中にそこを超越しうる道を示したのである。また法然は宿業に関して「念仏往生義」では次のように述べている。

壽命の長短といひ、果報の深淺といひ、宿業にこたへたる事をしらすして、いたつらに佛神にいのらんよりも、一すちに彌陀をたのみてふた心なければ、不定業をは彌陀も轉し給へり、決定業をは來迎し給ふへし。无益のこの世をいのらんとて大事の後世をわするゝ事は、さらに本意にあらず、後生のために念佛を正定の業とすれば、これをさしをきて餘の行を修すへきにあらされは、一向専念なれとはすゝむる也。⁴⁷

ここではまず宿業に応じて壽命の長短や果報の浅深が決まるという業の道理が示され、その上で宿業の道理を知らないで無益に仏や神に祈るよりは一筋に阿弥陀仏を頼んで二心なければ、つまり決定往生心を確立すれば、阿弥陀仏は不定業ならば転じ、決定業ならば來迎して下さる。無益にこの世を祈るよりも、後生のために往生の大事を忘れてはならないという。法然は壽命の長短や果報の浅深は宿業によつて定まっているとして、それをありのままに受け入れ、その転換の道筋として後生のための念仏を正定業とすることを勧めるのである。宿業を看過するのではなく直視し、そこを転換の起点や始点として、「一向専念」に念仏を修すべきことを勧めるのである。ここでは宿業をも

「一向専念」に導く方便として使われている。よって法然が「宿業」という語を使うのは、万機にわたって念仏への決定往生心を確立させ、業転しうることを説くためであるといえる。

おわりに

このように大乘仏教と浄土教における「転重軽受」の思想を見てきた。⁽⁴⁸⁾『般若経』では大乘經典の読誦や般若波羅蜜を行ずることで「転重軽受」しうることを説き、『涅槃経』では智慧ある人が智慧力・善業多・発露懺悔等の「身戒心慧を修習する」ことで「転重軽受」することを説き、『十住論』では「懺悔」することによって「転重軽受」のはたらきが得られることを説く。そのような経論の説示を踏まえて、懺悔の因と果としての滅罪を見て行く時には、その滅罪の相には転重軽受という機能があることを捉えておく必要があると指摘した。さらに源信は「業」思想との矛盾する点を指摘し、「転重軽受」や「業由願転」という仏教に伝統的な「転換」の立場から浄土教を開示している。その転換の力は源信にとつて大乘仏教の浄土教、その中でも「往生の業には念仏を本とす」という念仏論に基づくものであった。また法然は念仏に信が確立していない人のために、「転重軽受」という現益があることを示し、信心増上の契機として「宿業」という語を使うのである。

「転重軽受」の思想史というものを大乘仏教において設定するならば、そこでは懺悔によるはたらきが強調されている。懺悔とは仏などの有徳者を前に自己の罪を発露することであり、それは罪の状態から

出罪への転換の契機となる機能を果たすものである。それゆえ、懺悔は勧請・随喜・発願・廻向などと、いわば一組となつて四悔や五悔という型が出来上がっていくのである。阿闍世や央掘摩羅の罪のように業の報いを軽減したり、滅することができたということも、「懺悔」が業転の重要な機能を果たすからである。このような「業転」の思想として「転重軽受」の思想があり、一般に仏教では、転迷開悟とか転識得智・転依という語が用いられ、生死の迷いを転じて悟りを得る、有漏の八識を転じて無漏の智慧を得る、染汚を生み出す拠り所を転じて清浄化を生み出す拠り所を得る、というように、よりよき境涯への転換が説かれてきた。それは釈尊自らが、「比丘衆よ、所有ゆる過去世の応供・正自覚者なる世尊は悉く業論者、業果論者、精進論者なり⁽⁴⁹⁾」と説いたように、仏教が宿命論でも虚無論でもない精進論・業論の立場に立つからである。ここに見られる「転重軽受」の思想は浄土教、ひいては大乘仏教の救済論を構成する重要な要素であると見ることができるのである。

〔注〕

- (1) 神居文彰「病いの備荒―転重軽受について―」（『印度学仏教学研究』四十五巻第一号 一九九六年）尚、法州の『臨終用心追加講説』（『大日比三師講説集』中巻所収、一〇二八―一〇二九頁）では「転重軽受」に関して『涅槃経』に典拠を求めている。
- (2) 日蓮の「転重軽受法門」には「涅槃経に転重軽受と申す法門あり。先業の重き今生に尽きずして、未来に地獄の苦を受くべきが、今生に斯る重苦に値ひ候へば、地獄の苦ばつと消えて、死に候へば人天・三乗・一乗の益を得る事候。」とある。（『昭和重修日蓮聖人遺文

全集』上・七〇四頁)

- (3) 中村元・紀野一義『般若心経・金剛般若経』(岩波書店 二〇〇六年) 二二―二七頁 ただし大乘仏教の最初期に成立したことに疑問を持つ意見も出ている。『大乘經典解説事典』(北辰堂 一九九七年) 七二頁参照。

- (4) 鳩摩羅什『金剛般若波羅蜜経』(『大正新脩大蔵経』(以下、『大正』と略す) 八・七五〇c)

- (5) 菩提流支『金剛般若波羅蜜経』(『大正』八・七五五a)

- (6) 菩提留支『金剛般若波羅蜜経』(『大正』八・七五九c) 注(5)と同一人物である。

- (7) 真諦『金剛般若波羅蜜経』(『大正』八・七六四b)

- (8) 笈多『金剛能断般若波羅蜜経』(『大正』八・七六九b―c)

- (9) 義浄『仏説能断金剛般若波羅蜜多経』(『大正』八・七七四a)

- (10) 玄奘『大般若波羅蜜多経』巻第五七七(『大正』七・九八三b)

- (11) 鳩摩羅什・菩提留支・菩提流支・真諦・笈多・義浄は「軽賤」と訳し、義浄は「軽辱」、玄奘は「軽毀」と訳す。

- (12) 大品『般若経』巻第一(『大正』八・二二四b)

- (13) 『大智度論』巻第三七(『大正』二五・三三二c―三三三b)

- (14) 『大般若経』巻第七(『大正』五・三五a―b)

- (15) 山田龍城『梵語佛典の諸文献』(平楽寺書店 一九七七年) 八六頁参照

- (16) 同じように『大般若経』巻第四〇三(『大正』七・一六b―c 大品『般若経』にあたる)・巻第四八〇(『大正』七・四三七c―四三八

a 『光讚般若経』にあたる)が、この『大般若経』巻第七とほとんど同じ内容が説かれているのである。

- (17) 『大般若経』巻第一二六(『大正』五・六九三c)

- (18) このように例外規定が見られる所を挙げると、『大般若経』巻第三三七(『大正』六・七二九c)・巻第四二九(『大正』七・一六〇b)・巻第四五四(『大正』七・二九五a)・巻第五〇二(『大正』七・五六〇a)・巻第五一九巻(『大正』七・六五九a)・巻第五四一(『大正』

七・七八〇b)・巻第五五二(『大正』七・八四三c)・巻第五五七(『大正』七・八七六c)がある。

- (19) 北本『涅槃経』巻第一九(『大正』一二・四七七b―c)

- (20) アビダルマの心所法では、「慚」「愧」は罪意識の形成に関与する善の心作用であり、悪行を抑制するはたらきがあり、そのうち「慚」には徳ある者を重んずる「恭敬」を喚起するはたらきがあり、「愧」には罪に対して「怖畏」をみるはたらきがあるとされる。尚、この「慚」「愧」という二法の欠如が「大不善地法」とされている。經典では身を護る「衣」という譬喩で慚愧が語られている。藤堂俊英『生死之罪』攷(『浄土宗学研究』第二六号 二〇〇〇年) 参照。

- (21) 北本『涅槃経』巻第二〇(『大正』一二・四八三c)

- (22) この「獅子吼菩薩品」は、先学によって文脈がねじれているところが存在し、特に極めて哲学的・アビダルマ的内容を持っていると指摘されている。織田顕祐『大般涅槃経序説』(真宗大谷派宗務所出版部 二〇一〇年) 八六頁参照

- (23) 北本『涅槃経』巻第三一(『大正』一二・五五〇a)

- (24) 同(『大正』一二・五五一c)

- (25) 「智者善業多故重則輕受」とある。同(『大正』一二・五五一c)

- (26) 「我能發露懺悔除罪惡業能修智慧」とあり、懺悔により惡業を除くことがわかる。同(『大正』一二・五五三c) またこの「獅子吼菩薩品」では、この智慧のある人と愚痴の人の違いについて五つ挙げ、その愚痴の人の中の「四者不懺悔故」と説くことから、「懺悔」が「転」ずるものの一つであることがわかる。同(『大正』一二・五五三b)

- (27) 「修習身戒心慧。是人能令地獄果報現世輕受」とある。特にこの「身戒心慧を修習する」ことは、『涅槃経』巻第三一「獅子吼菩薩品」でよく強調されている。同(『大正』一二・五五三c)

- (28) 清水氏は定業・不定業がいかなる業であるかを理解するためには、『阿毘達磨大毘婆沙論』(以下、『婆沙論』と略す)を待たなければならないと指摘している。さらに『婆沙論』巻第二〇から、阿羅漢が

業果の必然性を勝れた定慧によつて、現世に転じて清算することを目指す。清水俊史「不定業と既有業―有部と上座部の業理論―」（『佛教大学大学院紀要』文学研究科篇第三十九号 二〇一一年）参照。そこで今、この不定業に関して説一切有部の根本論書である『婆沙論』にはどのように説かれていたか見てみる。『婆沙論』巻第一二四（『大正』二七・五九三b―c）には次のように述べている。

問諸順現法受業。定於現法受耶。順生順後爲問亦爾。譬喻者説。此不決定。以一切業皆可轉故。乃至無間業亦可轉。問若爾。云何説名順現法受業等耶。彼作是説。諸順現法受業不定。於現法中受異熟果。若受者定於現法非餘。故名順現法受業。順生順後所説亦爾。彼説一切業皆可轉。乃至無間業亦可轉。若無間業不可轉者。應無有能越第一有。然有能越第一有者。是故無間業亦應可轉。阿毘達磨諸論師言。諸順現法受業。決定於現法中受異熟果。故名順現法受業。順生順後所説亦爾。是故若問何故名順現法受業。乃至順後次受業。應以此答。

復有餘師。説四種業。謂順現法受業。順次生受業。順後次受業。順不定受業。諸順現法受業。乃至順後次受業此業不可轉。諸順不定受業此業可轉。唯爲轉此第四業故。受持禁戒勤修梵行。彼作是思。願我由是當轉此業。復有餘師。説五種業。謂順現法受業。順次生受業。順後次受業。各唯一種順不定受業中復有二種。一異熟決定。二異熟不決定。諸順現法受業。順次生受業。順後次受業。順不定受業中異熟決定業。皆不可轉。順不定受業中異熟不決定業。此業可轉。唯爲轉此第五業故。受持禁戒勤修梵行。彼作是思。願我由是當轉此業。復有餘師。説八種業。謂順現法受業有二種。一異熟決定。二異熟不決定。順次生受業。順後次受業。順不定受業亦各有二。一異熟決定。二異熟不決定。是謂八業。於中諸異熟決定業皆不可轉。諸異熟不定業皆可轉。爲轉此故受持禁戒勤修梵行。

ここでは、諸々の順現法受業は必ず現在において報いを受けるのか

という問いに対して、譬喻者は「必ず報いを受けるわけではない。一切の業は転じることによつて、乃至五無間業も転ぜられるのである」と説き、順次生受業・順後生受業も同様であると説く。また譬喻者は「一切の業は転じるべきであり、乃至無間業も転じることができる。もし無間業を転じることができないならば、第一有を越えることはない。しかし第一有を越える者はいないので、無間業もまた転じることができる。」と説いて、五無間業（五逆罪）も「転」じることができると主張するのである。そして、四業（順現法受業・順次生受業・順後生受業・順不定受業）の中で、三時業に関しては不可転であるが、不定業は可転であるとしている。この不定業だけが転じることができるので、禁戒を受持し、梵行を勤修して、この修行をしたので不定業を転じてくだされと願う「思」をなさないとい説くのである。次に五業と八業も同様であることを説いて、異熟定業は不可転であるが、異熟不定業は可転であると説く。このように『婆沙論』では、不定業を「転」じるために禁戒を受持し梵行を勤修すると説くのである。舟橋一哉『業の研究』（法蔵館 一九六九年）一八〇―一八四頁参照。特に舟橋氏は「阿毘達磨において、定業・不定業が説かれる最大の理由は、仏教の実践道と関連して「業の可転」という事を説かんが爲であらう。」と指摘している。

- (29) 『十住論』巻第五（『大正』二六・四五a）
- (30) 同 卷第六（『大正』二六・四八b）
- (31) 同 （『大正』二六・四九a―b）
- (32) 同 （『大正』二六・四八b―c）
- (33) 初期・大乘の『央掘摩羅經』については、中村瑞隆「央掘摩羅經について」（福井博士頌寿記念『東洋思想論集』所収 一九六〇年）参照。
- (34) 『探玄記』巻第七（『大正』三五・二五三c―二五四a）
- (35) 『華嚴經』巻第一五（『大正』九・四九七a）
- (36) 同 卷第三二（『大正』九・六〇五c）
- (37) 源信の師匠である良源（九一一―九八五）は、『極樂浄土九品往生

義』（『浄土宗全書』（以下、『浄全』と略す）一五・三一a）に新羅の僧、義寂（七世紀後半）の『無量寿経述義記』を挙げる。義寂は賢首大師法蔵と交渉があったと言われている。その義寂の著書の中で「転重軽受」について説かれているが、源信はこの箇所について引用していない。さらに源信が良源の著作を見たかどうかについては疑問視されているため、今回良源に関しては省略する。

(38) 『往生要集』卷中末（『浄全』一五・一〇五b—一〇六a）

(39) 同 卷下末（『浄全』一五・一四五b—一四六a）

(40) 『放鉢経』（『大正』一五・四五〇b）この箇所については『往生要集』の註釈書である良忠の『往生要集義記』に依った。（『浄全』一五・三五九b—三六〇a）尚、良忠はこの『放鉢経』は『文殊師利普超三昧経』と同名異訳であると述べる。村上真完『阿闍世王経・文殊師利三昧経』（『新国訳大蔵経』第九卷所収 大蔵出版 一九九四年）解題参照。

(41) 『往生要集』卷下末（『浄全』一五・一四六a）

(42) 『無量寿経』卷下（『浄全』一・三四）

(43) この源信の念仏論に関しては、また別の機会で取り上げたい。

(44) 今回取り上げられなかったが、この他に浄土教家では、珍海が「転重軽受」について述べている。『決定往生集』卷上（『浄全』一五・四八三a）また珍海は『三論玄疏文義要』卷第五「種子義（不失法事）」（『大正』七〇・二八二a—二八六c）で「転重軽受」について詳細に取り扱っている。

(45) 『浄土宗略抄』（『昭和重修法然上人全集』（以下、『昭法全』と略す）六〇四—六〇五頁）

(46) 『観念法門』の「又如彌陀經說若有男子女人七日七夜及盡一生一心專念阿彌陀佛願往生者此人常得六方恆河沙等佛共來護念故名護念經護念經意者亦不令諸惡鬼神得便亦無橫病橫死橫有厄難一切災障自然消散除不至心此亦是現生護念增上縁」を取意したものであろう。（『浄全』四・二二九a）

(47) 「念仏往生義」（『昭法全』六九—六九二頁）

(48) この他に「転重軽受」の思想に関連する大乘経論としては、管見に及ぶ限り、次のようなものが挙げられる。

『出曜経』（『大正』四・七四五b）・『大宝積経』（『大正』一一・五六b・五五九b）・『父子合集経』（『大正』一一・九五五c）・『得無垢女経』（『大正』一二・九八b・一〇一c）・北本『涅槃経』（『大正』一二・四六二b・四八三c・五五〇a—五五三c・五八二b）・南本『涅槃経』（『大正』一二・七〇四c—七〇五a・七二七a・七九五c—七九九c・八二九c）・『大般泥洹経』（『大正』一二・八七七c）・『観虚空藏菩薩経』（『大正』一三・六七九a）・『大乘善見變文殊師利問法経』（『大正』一四・五一四a）・『大乘智印経』（『大正』一五・四八五a—b）・『仏藏経』（『大正』一五・七九二a）・『不空罽索神變真言経』（『大正』二〇・二二八a—二三五b・三八二c）・『不空罽索呪経』（『大正』二〇・三九九b）・『不空罽索神呪心経』（『大正』二〇・四〇二c—四〇三a）・『不空罽索呪心経』（『大正』二〇・四〇六b）・『不空罽索陀羅尼儀軌経』（『大正』二〇・四三二c—四三三a・四三八b）・『聖莊嚴陀羅尼経』（『大正』二一・八九五a）・『弥沙塞羯磨本』（『大正』二二・二二四a）・『優婆塞戒経』（『大正』二四・一〇七〇c）・『金剛仙論』（『大正』二五・八四四a・八四五a・八四六a）・『菩薩善戒経』（『大正』三〇・一〇一一a）・『大乘阿毘達磨雜集論』（『大正』三一・七二九a）・『成実論』（『大正』三二・二九〇c・三〇六a）

(49) 『増支部』（『南伝大蔵経』一七・四七三）尚、藤田宏達「原始仏教における業思想」（『業思想研究』所収 平楽寺書店 一九七九年）参照

（おがわ ほうどう 文学研究科仏教学専攻博士後期課程）
（指導教員・藤堂 俊英 教授）
二〇一六年九月三十日受理